か わ ら 版

（夏号 NO 5）　2013/07/01 発行

年二回発行（1・7 月）

下関市立大学落語研究会 OB 会発行

電子版の扱いですので購読のためにはメールアドレスが必要となります。

編集長　　西川　隆喜

※大学同窓会 HP でもご覧になれます。

長州も土佐も薩摩も陸奥(みちのく)も

みな敷島の大和国人(やまとくにびと)　(NO6018)

発災後、3 年を迎えますが復興財源が適正に使われることを心から願っています!

（大学学術センター正面）

（下関駅前全景）

【暑中お見舞い申し上げます!】

三十何年かぶりに追い出し寄席に行ってきました。

まずやっているのかいないのか分からない、表に何の表示もなく人もいない、ハッピ姿でよびこみをしていたあの頃が懐かしい。思えばあれから四十年、時代は変わって当然である。今は卒業記念の身内だけの発表会のような催しであるらしい。前座でモノボケをやっていた、どうやら前説のつもりらしい、受けなくても一生懸命頑張っている、第一回の馬関寄席の大喜利を思い出す。初めてで緊張しながらも一生懸命なぞかけをみんなで頑張ってやったなー。そのあとに驚いたなんとコンパでやるようなゲームをやりだした。えー今日は落語会じゃないの。会場も小さな和室で目の前に高座があり、ふと門看の寄席を思い出した、もちろん門看のほうがはるかに立派ではあったが。それでもこの和気あいあい

とした雰囲気と馬鹿さかげんは市大落研の伝統であり四十年脈々と受け継がれてきたものである。これこそが奇跡の源であると思いたい。

落語のほうは練習不足がしっかり出ていて、これも伝統？なのかいやいやチョット違う気がする。パンフレットも間に合わせのざつなもので、笑仲に見せたら絶対に怒られると思います。所詮は学生落語なので細かいことはいいんですが落研である限り基本だけはしっかり受け継いで行ってもらいたいものです。卒業生の花見亭豆木は少し変わった人ですがなかなか味があって私なりに面白く聞かせていただきました、さすが四年生だなと思いました。残念ながら小生の腰がもたなくて中入りで帰ったのですが、やっぱり追い出しは対外的に披露すべきものでせっかくの高座がもったいなく思えます。十分にお客様に聞かせられる程度のものですし、四年間の集大成を見てもらうと言うのは大事なことだと思います。また、もう少し情宣活動をして、それなりの会場で是非、市民の皆さんに披露してもらいたいものです。

最後に、新歓寄席・納涼落語会・馬関寄席・追い出し寄席としっかり寄席をやっている後輩に感謝しつつこれからのますますの発展を祈ります。本当に今日はありがとうございました。

あばら家　笑司（沖井　孝志）昭和 49 年卒

この原稿は「追い出し寄席」が開催された１月には編集局に届けられていた。昔からコッコッと真面目な仕事ぶりが沖井さんの持ち味であったが、全く変わっていない信頼される人とはこういう人を言うのであろう。昨年夏に久しぶりで下関でお会いしたが、少し頑固そうにも見えた。余りもの解りのよすぎる人も問題がある。丁度上手い具合に歳を重ねているようだ!　**（編集長）**

【オマリー先生からのお便り】

皆さんお元気ですか？「皆さんが私の家族です」

まず、去年、市大の創立５０周年記念のお祝いに招待していただき、とても嬉しく思いました。この紙面をお借りして大学・同窓会の関係各位に心からお礼申し上げます。

その機会に、たくさんの卒業生の皆さんにお会することができ、多くの懐かしい思い出に浸ることもできました。そんな中でも、落研との関わり合いの深さはこの歳になっても強く残っています。個人的な付き合いもありましたが、昔のコンパや落語の発表会、川棚での集まり、去年の誕生日のお祝いなどは、とても楽しい思い出です。やはり何といっても人間の関わり合いによって人生が豊かになります。私は落研の皆さんとの関わり合い

を通して、日本人のユーモアをより深く味わうことができました。人生にはいろいろと辛いこともありますが、ユーモアをもって笑えることは大切なことです。

さて、人間が最初に笑うことを学ぶのは家族の中です。以前お話ししたように私の両親はアイルランドから「夢と希望を抱いて」米国に渡った移民でした。1929 年から始まった世界大恐慌や先の世界大戦等で、両親を含め 10 人の家族はさまざまな辛い時期を経験しましたが、いつも家族はともに笑うことができました。

そして、私自身が成長していく過程で、家族というものは血のつながりだけではないと強く信じるようになりました。本当の家族は、お互いに認め合い、支え合い、励まし合い、ともに笑うことができる関わり合いです。私にとって、人との関わりがあれば、それは家族のようになります。落研の皆さん、心の家族になってくださり、ありがとうございます。

最後に全世界の人々がひとつの家族になるよう祈ります。アーメン!

ジョン・ルーク・オマリー(元市大英会話講師)

日本で骨を埋める覚悟の先生(前列真ん中の大柄な体格の人)が、昨年、米国に一時帰国された際に、オマリー一族が集まり撮った記念写真。両親はお亡くなりになっているが、当時 10 人の家族は今や溢れんばかりの人数になっている。米国は個人主義の国と言うが、我々日本人こそ家族や一族の絆を真摯に考え直さなければならないのではなかろうか。

(編集長)

【圓（えん）ちゃんからの便り】

記事を記述するにあたり・・・

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が有りました。　被害状況は、メディアを通じてご承知の事と思います。宮城県・岩手県がひどく、福島県に至っては、地震による二次災害の“原発事故”が多く報じられました。　この内容については、省略させて頂きます。

皆様と殆んど交流が有りませんので、プチ自紹させて頂きます。私（浅海）は、Ｓ49 年卒。落研の創設者の 4 人+雑用担当の 5 番目の男です。

私は、ヒロセ株式会社にＳ49 入社して、嘱託と成って２年目です。会社は建設会社を顧客に、建設業に携わっている会社です。　2011 年大震災発生から、何度か東北地区を訪問して、復旧方法の会議に参加しました。実務はヒロセ東北支店が中心に復旧工事を熟しました。

今般、私が紹介をするのは、福島県に在る“宗像窯登り窯”が被災し、ヒロセのお客様の呼びかけで、「宗像登り窯再生プロジェクト」が発足されました。企業・個人合わせて、参加者は、100 人を超えました。　修復が完了して、2013 年 5 月 18 日に火入式を迎えることが出来ました。　写真は、その時に撮った物です。

（写真の説明）

①　最下段窯で崩壊状態（発生時に撮った写真を写す）、②　本人の写真　　③　登り窯（5 段の窯）の修復完成の写真です。

（窯の説明）

国の伝統的工芸品“会津本郷焼”の宗像窯で、奈良・東大寺で伝統的に用いられる抹茶碗「大仏茶碗」を奉納します。　奉納茶碗は、再生された窯の初仕事として焼き上げます。

東大寺に奉納するのは、萩焼が主流で、東日本の窯元は収めるのは初めて。

この奉納で、復興への第一歩を刻むことと成った。

芸術が好きな私としては、心の中で叫びました。

“修復で来て、良かった、良かった、ホントに良かった・・・”

春好亭　圓さん（浅海　輝夫）昭和 49 年卒

①崩壊した登り窯

②本人

③修復後の登り窯

やっとの思いで浅海さんからの投稿を得ることが出来た。落研では目立つタイプの人ではなかったが、卒業時に車検が残っている軽自動車をクラブに提供して頂いた方としてその名は轟いている。あの軽自動車の顛末がどうなったのかは今考えると謎めいている。貧乏生活をしていた誰かが売り飛ばしたのかどうか? 次回の OB 会の時に調査してみたい。なお、宗像窯とは宗像出雲守式部が、奈良時代（767 年)に福岡県宗像大社の布教のため福岡県宗像大社からこの地に移り住んだことによる。 **（編集長）**

【かけ橋】

現会長はあばら家　屁々林(ぺぺりん)→林　智樹(愛知県出身3年生)がされています。「追い出し寄席」には福岡教育大学落研の人達が聴きに来で頂いていたようです。

(千葉さんの「追い出し寄席」報告より)

【編集後記】

私の一日は「日本経済新聞」に目を通すことから始まる。特にお気に入りは終面に60年近く続いている「私の履歴書」である。学者・政治家・財界人・スポーツマン・芸術家・芸人等、ありとあらゆる分野の一流とされる人達の「出生」から「現在」までの生きざまを一月ほどかけて時系列に書かれており、私を含め多くの読者の人生の励ましとなっている。

さて、ゴースト・ライター(幽霊作家)という職業の存在を皆さんはご存じだろうか? 昨今は小説・随筆・評論を含め出版される書物の多くに幽霊作家が関わっている。そして出版界もそれらのことを広く黙認している。私自身がこの種の作家の存在を承知したきっかけとなったのも「私の履歴書」であった。随分前のことだが、日本語を話すのもたどたどしい「今年、国民栄誉賞をとられた長島茂雄」さんの文章に接したのが最初であった。テレビで聞きなれた会話と文章の内容に驚くほどの違和感があり、その時々にあったことを聞きとり、ゴースト・ライターが「長嶋茂雄」さんになり変わりまとめ上げたことが一目瞭然であったからである。

そして、今年1月1日～2月初めまで直木賞作家の渡辺淳一(79才)の「私の履歴書」が掲載された。落研 OB の尼子さんの学生時代を垣間見るような赤裸々な女性関係が書かれており、さすがは小説家だと納得していた。ところがである　！　掲載が終わり少しばかり経った頃、紙面の隅に「本人の意図するところにない表現をいたしました」旨のお詫びが載せられていた。

このお詫び文を見て私は実に情けない思いがした。なぜなら、プロの物書きの渡辺淳一さんが「私の履歴書」を人の手に委ねることは許されないと考えたからである。よしんば他人に自分の文章を任せた時の責任は、潔く自ら黙って取らねばならない。今年始まったNHKの大河ドラマ「八重の桜」の中でも幾度も出てくる言葉だが、会津藩の子どもたちが幼年期に叩き込まれた「ならぬことはなりません!」を、ひとかどの人であればあるほど肝に銘じて日々の行動に油断なく励んでほしいと強く願う今日この頃である。